

日常生活とメディア化する他者

王 傑文

WANG Jiewen

翻訳：西村 真志葉

はじめに

現代的な情報機器とマスメディアは、街角、コミュニティ、そして家庭に広く浸透している。こうした時代において、新しいメディアは個人が日常生活 (Everyday life) を理解するのに用いる中心的方法および手段となり、また、個人が日常生活の複雑性を理解する際にも、シンボリックな材料を提供している。日常生活の領域は、もはや曖昧さを増すばかりである。その結果、比較的早い時期に定義された日常生活および生活世界という概念は、ある種の挑戦状を突きつけられることになった。しかし、これは同時に、日常生活という概念の再構築にむけて新たな可能性が提示された、ということでもある。

1. 日常生活をめぐる理論

一般的に、人文科学の分野において、日常生活は抽象的思考と深奥な知識を排除する手段、と見なされている。それは人々を純粋な真実 (really real) へと誘い、現代社会における国家の政治組織と大規模な経済組織に批判の目を向けさせ、さらには自由が構造化された枠組みのなかでは実現できず、日常生活に求めるしかない、と思わせるのだ。

日常生活の定義は、つねに人により異なっている。しかし、異なる定義には共通項も含まれている。たとえば食事、睡眠、着衣、仕事、家事、遊びなど、また複雑な儀式、タブー、儀礼、パフォーマンス、そしてさまざまな象徴的活動などがそうである。つまり、日常生活は繰り返し示される、さほど重要ではないが必要不可欠なイベントだと見なされている。また、日常生活は習慣的な認識モデルと同等視されてもいる。これは、アルフレッド・シュッツがいうところの自然的態度に導かれ、何をしているのか完全に意識することなくままに行動する、まるで夢遊病者のような認識状態のことである。結局、日常生活という概念が指し示すのは、私たちの行為のなかのあえて意識されない世俗的なイベントのことであり、それらは私たち予測を裏切ることなく静かに展開されているのである。こうした日常生活は、西洋哲学の主流の伝統においてつねに無視されるものであり、その状況はアンリ・ルフェーヴルが日常生活の理論を提示するまで続いた。

日常生活の哲学について、点検と分析が必要である。その曖昧さを——その卑しさと豊かさ、

貧しさと繁栄を——提示し、非正統的な手段によって、その創造性のエネルギーを解き放たねばならない。これはその全体の一部である [Lefebvre 1971]。

その後の日常生活に関する理論において、日常生活はオーセンティックな生活の敵として蔑まれた。また単調で味わいに欠け、平凡で退屈で無感動であることから、アーティストが異化効果により救済せんとする対象となった。だがその一方で、日常生活には交錯する衝動と無意識な欲望が含まれており、革命の息吹と非凡な潜在能力を隠し温めているとも考えられた。まさにギー・ドゥボールが述べるとおり、「さまざまなかたちで現実を特権化された慣例のなかに隠すことに慣れてしまった後は、日常の裂け目とひずみに潜む奇観をじゅうぶんに理解するためには、高く引き上げられた意識が必要となる（これは日常生活の日常的態度と相対するものである）」のである [Debord 2002]。

こうしてみると、過度に親しんでいるゆえに見えなくなっている事象に新奇的な光を当てると、日常生活の日常性はその潜在能力が発見されることにより、平凡さを失うことになる。

つまり、日常生活をめぐる批判的理論の基本的な目標は、日常生活を疑い、その矛盾を暴き、その潜在能力を発掘し、私たちの薄っぺらな理解を批判的知識の水準まで引き上げること、つまり日常生活の平凡な領域のなかで、潜在的な非凡さを見ることにある。しかし、日常生活の理論に潜む論理によれば、大衆は自らの日常生活についてまったくの無知であり、少数のインテリのみが啓蒙者の役割を担うことができ、彼らだけが日常生活を救うことができる、となる。よって、徹底的な懐疑主義を信奉するインテリの自意識と、内省することを知らない一般大衆の普遍的意識のあいだには、対立関係が構築されてしまう。しかし問題は、なぜ慣例、習慣としての日常生活は、かならずしも懐疑の対象とされなければならないのか、という点である。実際の日常生活には、社会の下層からやってきた期待、たとえば秩序による安定性への期待や儀式がもたらす安心感への期待が含まれているかもしれないのである。

日常生活の理論と生活世界という概念は密接に関係している。リタ・フェルススキのまとめによると、ドイツの知の伝統において、シュテファン・ホワイトが生活世界を「思考における不思考、明確な含蓄、意識される前景の無意識な背景」と定義しているが、エトムント・フッサールはこうした経験性の背景を、超越的主体のモデルとして位置付けた。またシュッツは「我々がそこで遊泳しているが目に見えない海洋、意識的活動の所与の沈黙するコンテクスト」と理解し、ユルゲン・ハーバーマスはさらにこれを言語的・文化的・主体間の現象へと再構築した。絶え間ない理論上の調整を経て、生活世界は最終的に「特定の社会構成員が前もって仮定する解釈図式と意味モデルの総体」と定義づけられた [Felski 2002 : 607-622]。

あきらかに、生活世界のディスコースとは、本質上は描写的な理論にすぎない。それは慣例と当然視されるものを強調するだけで、日常生活における即時的な問題を説明しない。また、日常生活の知識が共同的で普遍的だと仮定する一方で、特定文化および社会内部の差異を軽視する傾向にある。しかし、日常生活の理論と比べると、生活世界のディスコースは生活世界の不可超越性 (Unsurpassable) という特徴をより強調する。つまり、私たちの思考において思考されない部分はいぜんとして曖昧、未知であり、私たち自身が理解・批判できる範囲を超えている、と考える。これを言い換えれば、私たちは自らの身体の外へ跳躍して、自らの思想と行為を可能にする前意識や前仮定について、認識することはできない、ということである。この意味において、人間の生活世界をめぐる理解は部分的でしかなく、生活世界そのものが解釈と征服に対するある種の拒絶となる。

日常生活に関する共通認識をまとめると、次のようになるだろう。まず、日常生活は個人の行為形式を含み、それはどうするか知っている (Know-how) 知識と呼べよう。同時に、集団的な習俗や儀式、道徳規範さらには集団の性格なども含まれているが、こちらは認識される (Knowingness) 知識と呼べるだろう。次に、日常生活には代々内省を通じて蓄積された信仰と実践が含まれる。さらに、いかなる社会集団と個人も日常生活を有しており、日常と非日常のあいだを移動し、これを転換している。日常生活の理論の批判的視点と生活世界の哲学思想が、理解能力について行う内省は、メディア化する現代の日常生活を理解する際、重要な理論的根拠となる。

2. メディア化する日常生活

上述のとおり、ルフューヴルが日常生活の理論を提示したのは、自由が組織化された枠組みの中では実現されず、官僚政治と大規模な経済組織の外にある日常生活のなかに探すよりない、と考えたからだ。よって、日常生活は現代の政治、経済以外の余計なものであると同時に、抵抗が抵抗する場を含み、さらにすべてを矛盾的に包括する総体と見なされた。だが、時代そのものの限界から、メディアが日常生活に対して持つ意味が、ルフューヴルの視野に入ることはなかった。

メディアについては、主体—客観という二元論で把握することが習慣化している。つまり、メディアを主体によって操作される客体と見なす見方が常態化している。しかし、人間と情報メディアのあいだの複雑な関係からして、こうした観点はあまりに簡素すぎる。事実、各種電子メディアはいずれも特殊な形で主体の位置を構築している。かいつまんで述べてみても、情報機器は世界中の異なる国と地域、異なる民族の情報を集約し、都市人口の異質性を力強く強化しており、現代の主体の視野を大きく押し広げた。だが、さまざまな異質の文化が並列化されることは、極めて危険かつ利己的である。これにより、都市本来のコミュニティの居住モデルは脱構造化され、こうしたコミュニティの地域的な習俗は破壊され、社会化プロセスをますます複雑化することになった。

個人について言えば、新しいメディアにまったく新しい、異質な文化形式を提供されたことで、その興味は刺激され、個性が形成される。こうした文化形式は、新しいメディアによって広まるのでなければ、個人にとって完全に未知なるものである。逆に、まさに個人が積極的に参加することで、こうした文化形式は生き生きと息づくことになる。この意味において、新しいメディアは空間的・社会的な距離を克服し、個人に豊かで選択可能な文化的手段を提供したといえるだろう。

もちろん、さまざまな新しいメディアが主体の構築に対して有している意味は画一的ではない。多くの場合ラジオは個人が単独使用するもので、テレビは一般的に家庭という環境において視聴されるものである。大多数の家庭において、テレビ鑑賞は伝統的な家族活動に取って代わり、集団的な大衆文化が家庭内に持ち込まれることになった。青年と未成年、また男性と女性ではテレビやテレビ番組に対する態度は異なるが、新しいメディアの技術的な特徴およびそれによって散布されるテキスト、イメージそして音声は、個々の日常生活に大きな影響を及ぼしている。とはいえ、テレビとラジオが広く普及する時代においても、個人はこれらのメディアを中心にしたリズムで日常生活を営んでいるのではないし、メディアに接触したという経験よりも、個人間の日

常活動の方がより重要である。だがそれでも、ラジオとテレビが個人の日常生活に入り込み、日常生活の経験の輪郭を大きく変えてしまったことは、否定してはなるまい。また、木版印刷からパソコンでのタイピングおよびプリントアウトへの技術革新は、個人のワークスタイルを徹底的に変容させた。伝統的な木版印刷の段階では、主体—客体のあいだの独立的な相互関係が強調されていた。一方パソコンによるタイピング技術は個人、キーボード、データベースおよびプログラムの演算能力などに関連する。そして、これら諸要素間の相互関係は認識能力を有し、まったく新しい象徴的な人間関係が構築されることになった。パソコンによる文書作成はもはや独立した個人的活動ではない。同時に他者とのコミュニケーション(チャットやメール、SNSなど)が必要とされる活動となっている。

新しいメディア技術の将来的な見通しでは、縮小複写技術を通じて、パソコンと身体の結びつきはさらに強まるとされる。ポータブル音楽プレーヤー、パーソナルデジタル設備、赤外線通信対応のモバイル・タブレット端末、GPSなどなど、これらは日常生活における個人に影のごとく寄り添って離れない。視聴設備はすでに日常生活のさまざまな空間に普及しており、上に挙げた電子機器を携帯していない個人はもはや少数派である。しかも、未来の新しいメディア技術はさらに見えなくなってゆくだらう。それは眼鏡や衣類、ひいては身体の一部になるかもしれない。「電子メディアが日常化するにつれ、人々は徐々にそれらの存在を意識することがなくなり、最終的に日常生活の背景に消失していくだろう」[Poster 2002 : 743-760]。

いたるところに遍在する電子メディアは、多種多様な可能性と利便性を提示すると同時に、大きな危険性を孕んでもいる。たとえばGPS技術はストーキングに用いられるかもしれない。個人情報本人の知らぬ間に公開されるかもしれない。こうした意味において、メディア化する日常生活は個人がアイデンティティを構築する戦場の様相を呈してくる。だが、アイデンティティの構築はコミュニケーション、そしてメディアなくしては成り立たない。現代社会を生きる主体は、しだいにメディアが提供する世界と他者についての意義とその解釈に依存し始め、自らが生きる世界の意味を理解する際にもそれらを必要とし始める。メディア化は、現代の主体が私と世界、私と他者の関係性を理解し、構築する際に解釈の枠組みを提供することで露呈する。そしてメディア化する日常生活は、日常と非日常、公共とプライベート、私と他者との間の境界線を曖昧にしてゆくのである。

3. メディア化する他者

メディア化する日常生活は、社会的・道徳的な空間である。まさにこうした空間において、理性や価値、意義、責任、義務といった日常生活の倫理は維持され、創造される。日常生活は個人と他者の交流を意味する。もしも交流がなければ、日常生活の倫理は実践され得ない。よって、日常生活の倫理学は自己と他者の関係性を考察し、両者の差異を黙殺してはならないことを認識する必要がある。交流は他者を完全に同化させることはできないし、自己と他者は非一非異(同一ではないが異なりもしない)なのである。日常生活の理論は、この避けがたい不愉快な世界において、私たちが他者に責任を負わなければならないこと、そして他者の世界が完全には知り得ない、理解不能な世界であり、それゆえ謙虚でいなければならないことを教えてくれる。「他者はいつも厄介だ。しかし、他者に責任を負うことは、人が人であるための先決条件であり、他者は抹殺されてはならない」[Silverstone 2002 : 761-780]。

メディア化をめぐる日常生活の倫理学の重要な課題の一つとして、メディア化する他者を考察することが挙げられる。メディアが他者を表象する際に担う役割はとても重要で、メディアは空間上の距離を超え、まるで現場に立っているかのような幻覚を創造する大切な手段である。こうした幻覚は、現代の主体が他者を理解する仕方に、深い影響をもたらした。

ニュース類のテレビ番組を例に挙げよう。テレビは視聴者に侵略戦争や自然災害、政治スキャンダル、テロリズムといった身の毛もよだつ現実を見せるが、視聴者が本当に責任と義務を担うことを要求しない。テレビは視聴者がある種のメディア的景観へ連れてゆくが、視聴者はその現実の複雑性に関わりを持つ必要はない。たとえば、ウサマ・ビン・ラーデンを首謀者とする地下組織をめぐるのは、空間のうえでとても遠いようで近いように表出され、私たちは近づくことができないからこそ、このメディア化された他者に不安を煽られる。そしてこの同じ不安感が、彼らへの制圧に正当性を賦与するのである。彼らのイメージに関するこのような主導性は——その他の性質のイメージとコンテキストが欠如している——、彼らに疑いと悪意を持つ文化を力強く支持しており、道徳的判断(他者に対する敏感さと責任)を下すことはほぼ不可能になっていた。

また、メディア化には、このように他者を魔物化し、私たちと他者の間の共通性を消滅させるやり方とは異なる表象戦略がある。それは、私たちと他者の差異を完全に否定するもので、他者のイメージは当然のごとく、すっかり親しまれ当然視されているナラティブの構想とディスコースの枠組みへと組み込まれる。中国中央テレビのメインニュース番組「新聞聯播」式の常套句もまさにこうしたテンプレートであり、千差万別な事件を画一的で整然としたナラティブの模式に当てはめる。

メディア化する他者は、以上のように両極端な表出の仕方のあいだで揺らいでいる。メディア化された情景は、視聴者と他者を遠ざけるだけではない。この他者を表出している主体を、視聴者から遠ざけている。視聴者は他者の置かれたコンテキストを理解することはできないし、他者を表出している主体の意図を理解することもできない。メディア化する日常生活において、メディア化する他者についての責任意識を省みて、メディアのイデオロギーに立ち向かわなければならぬ。そして、メディアのナラティブ構造、表現技術、類型および定型句に、警戒し続けなければならない。私たちがメディアの表象戦略に対して批判的態度を堅持し、メディアの表象が自らの規則と類型に制限されていることをはっきり認識し、そしてメディアの表象そのものの局限性と不可能性を記憶にとどめておかなければならないことを、日常生活の理論は教えてくれる。

4. 日常生活の秩序への欲求

バーミンガム大学現代文化研究センターの研究者によれば、テレビの視聴者は積極的な参加者であるという。積極的な参加とは、責任を負うことを意味し、またテレビが映し出し、表現するものに批判的態度を保つことを意味している。そうでなければ、視聴者はメディアの共謀者となり、共犯者として他者を貶める汚名化行為に参加することになってしまう。つまり、一方では他者をじゅうぶんに理解できると信じ、他者の表象に関するメディアの事実性および権威性を信じる。また一方では、メディアが必要不可欠であり、とくに世界と他者を理解するには欠かせないものだと考え、そしてメディアが確かにその任務を担い得ると信じる。こうした人々は、メディアの共謀者として、メディアが報道する内容を信じ、メディアが報道し得る能力を有していると信頼しているのである。

日常生活の理論を提唱する人々は、その批判的な立場を強調する。しかし、現実の生活において、現実に挑戦したい、他者に対して責任を負いたい、メディアの信頼性に挑みたい、と考える視聴者は多くないだろう。彼らは意識的に、或いは無意識のうちにメディアと共謀関係を結ぶのである。まだよく知らない、情報のまともでない他者を理解する際、視聴者はメディアが他者について行う定型化された、なじみ深い描写を受け入れ、普段から親しんでいるディスコースの構造のなかで理解することを望んでいる。つまり、複雑なものを簡素化することを望んでいるのである。

日常生活の理論を唱える人々が批判するように、日常生活は簡単で、心地よく、秩序だっていることを望んでおり、メディアはまさにそれに迎合している。しかし、視聴者とメディアが共謀する深層的論理から見れば、メディアが現実について行うメディア化およびその表象的実践のなかに、日常生活が心地よい居場所を持っているといえる。メディア化される表象は、主体に強要されるのではない。日常生活の基礎において、主体がメディアを選択するのである。主体はメディアが氾濫する日常生活から逃れることはできない。ふたたび中国中央テレビの「新聞聯播」を例に挙げよう。多くの中国人にとって、「新聞聯播」を毎晩19時定時に視聴することは、少なくとも二つの欲求を満たすのにつながっている。

まず、定時に放送される「新聞聯播」が、通過儀礼のような機能を持っている。多くの人が習慣的にこれを視聴し、その前の仕事から儀式的に解放され、儀式的な視聴活動に浸る。そして、「新聞聯播」の終了が、1日の仕事の完了と休息の始まりを象徴するのである。ほとんどの人は、わざわざ「新聞聯播」の放送時間を選んで誰かに電話をかけることはしない。こうした意味において、「新聞聯播」は仕事と休息のあいだの儀式的な境界線の役割を担っているのが分かる。

つぎに、「新聞聯播」の定型化した構造モデルとナラティブの戦略が、視聴者に親しみをもち受け入れられており、安心、安定、まったく異常なしといった感覚をもたらしている、という点である。

「テレビニュースは基本的にナラティブである。同じストーリーがエンドレスに続く物語であり、ただし同じ物語の最新バージョンなのである。人びとはそもそもニュースのなかの事実や登場人物、人物の名前を憶えていることはできない。こうした内容はつねに変化している。しかし、ナラティブの枠組みやイメージの体系は一貫しており、それは伝統的である [Selberg 1993 : 201-216]。

この意味において、ニュース自体が重要なのではない。重要なのは、ニュースのナラティブモデルの反復性と親しまれていることである。

事実、日常世界において、曖昧さと不確定さは危険を意味している。大部分の人にとって日常生活はきびしく、不確定性と戦い続けなければならない。この意味において、日常生活そのものに、秩序への要求が含まれているといえるだろう。

5. まとめ

現代世界は、現代化したメディア技術がこぞって日常生活の潮流に流れ込み、現代メディアが日常生活の曖昧さや矛盾性をより複雑化するのを目撃してきた。日常生活とは、非現代的な政治

と経済の余り物であり、それは創造性や超越性、ゲーム性、そして可能性で満ちている。また同時に、日常生活は技術の理性や秩序、官僚化した管理モデル、商品化、資本化の影響を受けずにはいられない。つまり、日常生活の異質性、予期不可能性および目標志向性により、日常生活の理論を更新することが求められている。

現代メディアはその秩序だった形(たとえば放送日時やナラティブ構造)をもって、不確定性と矛盾性を解決するための枠組みを提示することで、視聴者の不安感を減少させ、日常生活における秩序と安全への需要および渴望を満たした。日常生活の世界は、個人の身体的経験と感知のなかに根を張っているが、同時に物質のレベルと象徴のレベルとの両方に表現もされている。日常生活の反復性、親しみそして予測可能性は安心感をもたらす一方で、現代メディア技術は個人の身体感覚に大きな影響を及ぼした。私たちと他者の身体が脱物質化されたのである。メディアは一種のバーチャル空間を作りだした。そして直接的なコミュニケーションの欠乏により、身体間の差異をめぐる感覚は損なわれ、個性は極端化し、他者と繋がりを持っているかのような幻覚が生み出される。メディア化・極端化する自己中心的な日常生活は、プライベートなものを公共的なものへ、固有のものを共有されるものへ、異なるものを同じものへ、遠いものを近いものへ、不平等を平等へと偽装する。

現代メディアは、私たちに特定のメディア化の枠組みのなかで他者を見せ、理解させる。しかし、私たちが他者の日常生活に足を踏み入れようとしても、その距離が設けられた表象モデルによって拒絶される。同様の理由で、他者の挑発・挑戦を受けて立つこともできない。その結果、私たちの日常生活は、メディアによって安全で、画一的に整備された聖地のような空間が提供された、といえるかもしれない。だがその空間は、メディアと視聴者が共謀して構築した、隔離され、孤立化した幻の園である。メディア化された他者は、現代社会を生きる個人の日常生活において非常に重要な内容となっており、それは個人がアイデンティティを確立し、人と人とのコミュニケーションモデルを構築するための大切な資源でもある。しかし、日常生活をめぐる批判的理論は、私たちにそれを選択的に理解し、責任を負い、挑み、変えようと努力してみてもよいことを示唆している。しかも、他者に対するこのような理解は、私たち自身が存在するための前提なのである。たとえその理解が永遠に完全なものにはなり得ないとしても。

参考文献

-
- Debord, Guy 2002 "Perspectives for Conscious Alterations in Everyday Life," in *The Everyday Life Reader*, ed. Ben Highmore, London.
- Felski, Rita 2002 Introduction, *New Literary History*, Vol.33, No.4.
- Poster, Mark 2002 *Everyday (Virtual) Life*, *New Literary History*, Vol.33, No.4.
- Lefebvre, Henri 1971 *Everyday Life in the Modern World*, tr. Sacha Rabinovich, New York.
- Selberg, Torunn 1993 *Folklore and Mass Media*, *Nordic Frontiers: Recent Issues in the Study of Modern Traditional Culture in the Nordic Countries*. Pertti J. Anttonen and Reimund Kvideland, eds. Turku, Finland: Nordic Institute of Folklore.
- Silverstone, Roger 2002 *Complicity and Collusion in the Mediation of Everyday Life*, *New Literary History*, Vol.33, No.4.

